カ、舞鶴（入港三十口、上陸十二月二日）。

13、昭和二十四年十二月十日　帰宅。

四、私の帰国後の苦労

私が最重労働をしている間に妻は二人の幼児を連れて、昭和二十二年真岡、函館経由で帰国。無理がたたり現在まで、重度のリューマチの後遺症に悩まされている。

私は舞鶴で、千円の支給を受け、大金だと思っていたが、家に着いた時は二百円しか残っていなかった。抑留五年で経済事情が変化し、浦島太郎のような苦労の連続だった。

帰国後の就職は、警察の復職はだめで雑穀商の経験を生かして、砂糖や小麦粉や澱粉等の集荷をして加工業者に納入する仕事をはじめた。雑穀よりジャガイモの方が小資本で大量の取引きができ、食料品のジャガイモを専業にし、家族ぐるみで有限会社を設立した。年商一億円を頂点にし、設備投資やら天候不順の年まわりがたたり、再起不能の損失を生じた。

二代目の息子の経営で可愛想だったが、シベリアの苦労を思えば、これぐらい苦労の内に入らないと頑張らせている。

真岡の艦砲射撃に伴う八月二十日前後の思い出

北海道　佐藤晴夫

戦争は終わった。私はソ連参戦とともに特設警備隊に応召し小能登呂飛行場警備の任に着いていたが、翌十六日召集解除になり、再び村役場（真岡郡蘭泊村）の庶務主任に戻ると早速婦女子の緊急本土引揚げ業務に忙殺されていた。引揚げの方法は陸上輸送（鉄道により大泊から海路を利用する。）と海上輸送（村の漁船を動員し計画的に蘭泊港から稚内港に運ぶ）の二つであった。

十九日に第一班を鉄道で送り、二十日の朝第二班を送るべく早起きをして外気を吸っていると、家の前を通った友人から「早朝恵須取方面から避難して来た船が、洋上でソ連艦隊と遭遇し、慌てて蘭泊港へ寄港したとのことだ」と話をしてくれた。そういえば、遙か沖合いに数

条の煙りがたなびくのが望見され南下しているようであった。ともあれ、佐藤村長とともに約百五十人ほどの第二班を送るべく蘭泊駅に赴いた。

午前七時、野田方面から汽車が入って来た。ここから乗る割当車両を残し他は野田方面からの婦女子で一杯であった。駅頭で『気をつけて行くんだよ。』『父さんたちも体に気をつけてね。』…残留家族らと別れを惜しんでいるとき、突如、ドローン・ドローンという音が響き渡って来た。一同は雷かしら?といぶかっていたが、私はとっさに砲撃の音だと直感した。軍隊の経験と、早朝見た沖合いの煙りで艦砲射撃ではないか、これは大変なことになったと思った。早速、駅長に真岡を確かめるよう依頼したがどうしても電話が通じないのだという。ともかく定刻になったので駅長が汽車に発進合図の手を上げたところ、駅員が慌ただしくホームへ走ってきて「真岡が艦砲射撃を受け戦場化したので来るな」との連絡があったとのこと、汽車はすでにホームを滑り出していたが緊急合図をして再びホームへ戻し一旦乗車した村の婦女子を下車させるとそのまま汽車を野田へ引き返えさせた。

ホーム上で村長と緊急協議の結果、富内岸沢入口の浄土寺を村の防衛対策本部にすることとし、下車した婦女子はそのまま富内岸沢の農家に避難させ、村の幹部を本部に召集するとともに、なお全村民に対しては、警防団を通し沿岸地帯の住民は急ぎ羽母舞沢、富内岸沢など安全地帯に避難するよう指令し、村長は直接対策本部に赴いた。

私は、一旦役場に戻ったところ佐藤助役外二、三人の職員が緊急出動していた。更に二、三人の部落会長が見えて興奮した口調で助役に「われわれ漁民はいくらでも船で自力引き揚げができた。それを役場で統制し抑えたため帰れなくなった。その責任はどうしてくれるのだ。」と口々に罵り叫んでいた。そこには樺太庁警察部から警部補以下二人が、引き揚げの指揮、指導に派遣されて来ており同席していたが、何も言えずにただ黙しているだけであった。そこへ前の特設警備隊長であった戸屋中尉がひょっこり入って来て、この様子を見ると「君らは今ここで結果を批判してどうなるのだ。それよりも一刻も

早く部落に戻り住民の安全を考えてやるべきではないか。何をゴチャゴチャ言っているのだ。すぐ帰って対策を立て給え。」と一喝した。どうなるものかと案じていたら憤慨していた部落会長らは「解りました。」と帰っていった。

戸屋中尉は、私が訓練召集を受けたときの隊長で、私がソ連参戦で召集されたときは既に代わっていて、いま何の任務についているかは不明であった。戸屋中尉は私をみつけると「おう佐藤、元気でいるか。」と声をかけ、村長らが浄土寺を本部として対策中のことを告げると「よし、本部へ行って対策を立てよう。佐藤、本官の副官を命ずる。一緒に来るがよい。」という。私は一瞬驚いたが、助役が目配せをするので戸屋中尉について本部となっている浄土寺に赴いた。そこには、村長の外在郷軍人分会長、警防団長など村の幹部が集り、更に村に駐屯部隊の山形という中隊長も列席しており早速戸屋中尉も加わり、情報の収集・伝達や警備態勢の万全など協議した。

何にも増して婦女子の安全を考えることが協議の中心であった。やがて助役以下職員らも役場を引き払い本部に集合、本格的な対策がはじまった。私と句友柴田茂光君（青年学校教官）とが報道班を担当することになり、ガリ刷りで機関紙『黒ゆり』なるものを発行し、当面の情報や指令を伝えるほか、村民の動揺をすこしでも柔らげるため詩や俳句・短歌・コントなど折り込むなどの工夫をし、随時、婦女子らの避難先へ配付したのであった。

各部落や拠点から来る情報はまちまちであった。『ソ連の舟艇が接岸し偵察隊が上陸した形跡がある。』『霧の沖にエンジンの音が聞こえソ連艦が近づいている気配がある。』こんな真偽あいまいな情報も飛び込み対応に大変であった。更に日中はソ連機が上空を飛来することも度々であったが、あるとき『ソ連機にハンカチを振っていた男を捕まえた。どうもスパイらしくソ連機に暗号を送っていたのではないか。電柱に縛りつけて置いたがどうすればよいか』という報告があった。その結末はどうなったかわからないが、敗戦国となった途端日本人の頭は支離滅裂となってしまったのであろう。流言飛語が飛びか交うことしきりであった。

このままではソ連軍が戦域を拡大、北上の気配もあり、緊迫した情勢にある。この際わが村民の従順を表明し戦禍に巻き込まれないよう交渉すべきだとして民使を派遣することになった。そこで戸屋中尉から「村長は残って村民を把握し安全を図るようにされたい。その代わり本官が村長に代わり全権の委任を受け交渉に当たりたい。車両や通訳のできる人を配置してほしい」との発言があり これに従いその人選が行なわれ、本人らも了承した。代表戸屋中尉、笹原蘭泊郵便局代理（アレキサンドロフに住んだことがあり露語できる）、山崎運転手（警防団の消防車を使用するため）、軍から兵隊一人（露語の教育を受けた兵隊）、この外、本人の自発的意志により小島兵長、村元兵長（いずれも在郷軍人）の六人が民使としてゆくことになった。

私は、このことと前後して、村長から内命を受け万一に備え『兵籍簿』や機密書類を焼却すべく馬車一台を徴発して火葬場へ運び秘かに処分していた。たまたま役場前で作業をしていたところを前記民使一行の警防団消防車が白旗を揚げて通り、前方の郵便局から笹原局長代理を乗せて出発しようとしていた。私は、戸屋中尉外一行に「ご苦労さまです。」とあいさつをすると、戸屋中尉は「佐藤、それでは行ってくる。あとは頼むぞ。」の声を残し真岡へ向かって行った。

やがて書類の処分を完了し、本部に戻ると誰かが「いやー佐藤さん。あなたを探していたんだ。じつはあのあと逢坂の前線から軍特校が騎馬で本部へ見えてね。その将校の言うのには悪逆非道なソ連軍は停戦交渉に赴いたわが軍使を国際法を無視して射殺する有様だから、まして民使などもってのほか。すぐ引き返させよ。更にこのままでは村は孤立してしまうぞ。何をされるかわからない。軍は逢坂の前面で防戦しているからその後方を通り豊原へ避難させよ。と命令して帰った。急拠民使を引き返させるために佐藤さんに行ってもらおうと探していたんだが止むを得ず柴田さんと名古さんに行って貰った。」という話であった。私が機密書類焼却に行ったことは、村長の内命だから知っているはずなのに、村長も混乱に紛れ失念したようだった。

ところで夜になっても民使一行は勿論連絡に行った二

人も帰って来なかった。止むを得ない。村長は、全村民に指令を出し、日中は敵機が飛来するので夜間行動で豊原へ避難する者は二十一日夕方まで富内岸沢に集合するよう指示した。しかし、村民の中には樺太中逃げ歩いても結果は同じだから、どうせ死ぬのであれば生活して来たこの地で死にたいというものが続出し、豊原へ避難したい者だけを連れてゆくことになった。村長は「村民が一人でも残るのであれば私も残り運命をともにしたい。」と発言し、結果は村長の指示で助役と井上経済主任（引揚後芦別市に在住後死亡）それに私の三人で引率してゆくことになった。

八月の樺太は日暮れも早く、秋風が肌に寒い。日没を待って推定六百人の一団が長蛇の列をつくり豊原への逃避行が始まった。中には病人をリヤカーに乗せ曳いてゆくもの、乳飲み児を負い五、六歳の幼児の手を引いてゆくもの、私たちが前になり後になりして激励して歩くと「佐藤さんよろしく頼みます。」と言葉が返ってきて、その責任の重さを噛みしめながらの行進であった。

私は女房に「私は村民を安全に引率してゆく責任がある。この際私を頼ることなしに行動せよ。」とかねて申し渡して置いたから、女房は一歳未満の長男を背負い、おしめ一包みを持っての行進であった。途中、樺太山脈越えの清蘭峠という急坂があり七曲りか八曲りのくねった山道をただ黙々と登ってゆくのであった。峠越えしてしばらく行くと清水村緑江という部落に入った。時計を見ると真夜中であり部落は一軒残らず藻抜けの殻であった。そして、すぐそこで戦争をしているのであろうか。銃声が間断なく聞こえて来た。空き家には今朝炊事でもしたのか御飯を炊いたままの家もあった。鶏舎があり卵も充分にあり食糧には不足はなかった。避難行のみんなを一時休憩させ、食べるものがあれば空腹を満たすようにした。この部落は本部から約十四、五キロはあるという。

休息しているところへ本部からの伝令だという者が来て「ソ連との停戦協定が成ったのですぐ村へ戻るように」とのことであった。引率者の三人で協議した。この伝言を信じてこのまま戻ってそれがデマであったとしたら大変なことになる。助役から「佐藤さん、君は若いからご

苦労だが、本部へ戻って確かめて来てほしい。それまで村民をここに待機させておく。」ということになり、私が、再びいま来た道を本部へとって返すことになった。大変なことだが大事の前には致し方ない。自転車を駆して走り出した。そのうち自転車がパンクしてしまう。しばらく歩いて空き家から自転車を失敬しては乗り継ぐ。こんなことを繰り返して走った。

本部に戻ったら、やはり停戦協定の成ったことは事実であった。本部ではお祝いに牛一頭を屠り牛鍋で一杯やったとかでみんなゴロ寝をしていた。いささか腹立たしく感じたが、そんなことは言っていられない。早速停戦協定文をガリ刷りにすると携帯の図嚢に収め、朗報を待ち焦がれている避難民を考えると休憩することもならずトンボ返りで再び自転車に飛び乗り、現地へ戻ったのは既に明け方であった。

直ちに仮泊先の避難民にこのことを伝え朝食の済み次第村へ戻ることになった。ふと女房や子供が気になり調べると、戦場に近い一番先きの家に仮泊していることがわかった。ほっとすると同時にいざとなると母の強さというものをかい間見るおもいがした。さて帰るとなるとがっくりしてしまった。私にとってこの逃避行は清水村まで一日二往復の約六十キロの大行動で、綿のごとく疲れ果てた体をひきずりながら、連れこぼしのないようしんがりを勤め、わが村へ辿りついたのは二十三日の夜であった。それにしても民使六人と連絡に行った二人は遂に帰らなかった。そしてこの事件の数日後、柴田君と名古氏の射殺された死体が知志内の浜で発見された。さきの民使六人が乗って行った消防車は、そこから更に北真岡寄りの路傍に、数発の弾痕を残しながら転覆放置されているのがわかった。しかしあの六人は射殺されたのか、拉致されたのかいまもようとしてわからない。

それに、私の身代わりとなってしまった句友柴田君は若冠二十五歳で命を絶ったわけで、いまも想起すると断腸のおもいがしてならない。